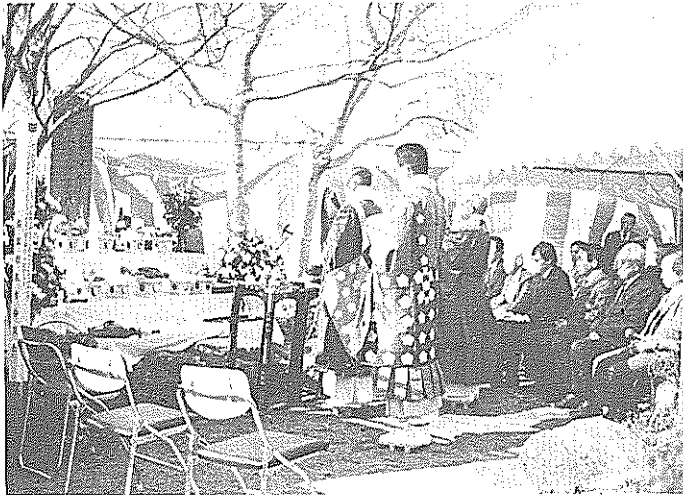


1050年の昔 ○ ○ ○

# 貫之の門出をしのぶ

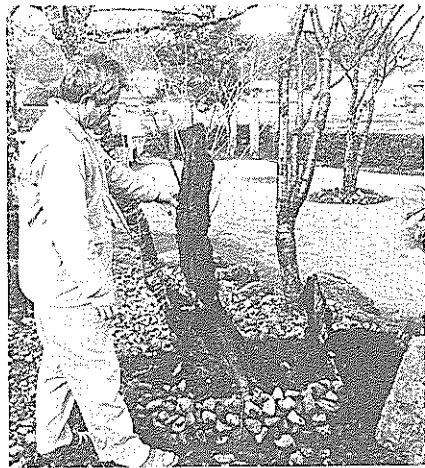
## ◆土佐日記門出のまつり◆



▲約100人が集い、貫之の門出をしのんだ

紀貫之が四年間の国司の任を終え京都へ旅立った日を記念し、比江の紀氏邸跡で二月十日、初めて「土佐日記門出のまつり」が国府史跡保存会（乾常美会長）によって開かれました。

平安の歌人紀貫之は、延長八年（九三〇）一月、土佐の国司として京都から着任しました。そして四年の任期を終え、二カ月におよぶ京都への舟旅を書きしるしたのが『土佐日記』。それによると、比江の国司館を出発したのが旧暦十二月二十一日で、それは二月十日



◀焼け落ちてしまったさくらの古木

に当たり、今年はずいぶん千五十年めになっています。これを記念に、貫之の門出をしのぼうと、今回催したくなったもの。

参加者には、『土佐日記』の研究者として知られる竹村義一前高知女子大教授、岡林清水高知大学教授、北岡博市文化財審議会長、歌人や俳人など百人が集まりました。

紀氏邸跡前で永源寺の島崎利昭任職、国分寺の林広裕住職らによる法要が行われた後、出席者が献花。あいさつに立った乾常美会長は「感慨無量だ。悲ろにお祭りで、裳立山に眠る貫之の霊も喜んでくれたと思う。今後とも会員一同、貴重な史跡を保護管理していきたい、後世に残していきたい」と。

この後、国府地区公民館に会場を移し懇話会が行われ、『土佐日記

記』や貫之について話がはずんでいました。

### ゆかりの桜

#### 焼失

『土佐日記』懐にあり、散る桜。これは昭和六年、俳人高浜虚子が『土佐日記』を懐に、比江の紀氏邸跡を訪ねたときの句。この句に詠まれた桜は、今は朽ち高さ二尺の古木が残るのみとなっています。二月一日、だれのいたすらか焼失してしまいました。



地元の人によると、一日夜六時ごろ、紀氏邸跡から炎が上がっているのを見つけ、急いで消火にあたりましたが、すでに遅く古木は真暗焦げに。幸い根から分かれた若木は無事でしたが、「古木の分身ということがわからなくなっていました」と、地元の人ば残念がっています。

後免町老人クラブ若葉会

## 手縫いのぞうきんプレゼント

お掃除に使ってくださいと、後免町の老人クラブ若葉会（徳島常一会長、会員五十二人）が一月二十二日、お年寄りたちが丹精込めて作った手縫いのぞうきん百枚を、後免野田小（栄枝利実校長、三百七十一人）へ贈りました。

栄枝利実校長は「心のこもったプレゼント、本当にありがたい。大事に使わせていただきます」と。徳島常一会長は「これからも、こうした社会奉仕活動を続けていきたい」と話していました。



ぞうきん百枚を徳島会長が手渡す